
トランスマイクリエーション

Rinn5

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トランスマイクレーション

【Nコード】

N9624X

【作者名】

Rinn5

【あらすじ】

ただの高校生だったはずの俺、神坂優斗^{かみさか ゆうと}は、最近世間を騒がせていた通り魔に襲われかけた幼馴染を庇い助けた。そこで終わってればいいものの、俺は逃げ出した犯人を捕まえようと躍起になって、後先考えず道路に飛び出してしまいトラックにひかれてしまった。ああ、儚き人生。しかし、物語はまだ終わらない。気づけば俺はなぜだかまだ生きており、そして、目の前には武装した謎の集団がいた。さらに、わけもわからず謎の集団に襲いかかれ二度目の死を覚悟したその時――

行き当たりばったりの主人公がファンタジー世界で奮闘していく物語です。

プロローグ（前書き）

初投稿です。

内容も更新もかなりのスローペースになりますが。頑張っていく
と思っています。

駄文ですが、暇つぶしに読んでやってください。

ブローグ

刃、刃、刃、刃。

それは物を切るもの、あるいは人を斬るために存在するもの。

常日頃平和的に毎日を過ごしていれば見る機会すらほとんど無いそんなもの。

事実ただの高校生である俺は、料理をするときでさえ包丁をにぎればビビって手が震える。

そんな非日常の塊が今、俺の命を刈り取らんとしてこちらに向かってきている。

鈍色に光るそれは、ところどころに赤い液体がついていてこれまでもたくさんの命が刈り取られてきたってことがわかった。

そして、当然ただの高校たる俺は突発的なそれを回避できるはずもなくぶざまに切り刻まれていく。

右足、右腕、腹、そして首筋。

順に切られた部分からせき止めていたダムの水が決壊し、そのあふれんばかりの容量をもってして水撃に変わるように血が噴き出した。

ああ、ちくしょうめちゃめちゃいてえ。

何だかよくわからない何にたいしてかさえわからない後悔と理不尽なことにたいする怒りが痛みによる叫び声とともにいまにも爆発しそうだ。

現に俺は、情けない姿だけは曝すまいと唇を血がでるまで噛み締め俺を切った相手を睨み付けようとしているが、その目からは涙がとめどなくあふれ出てきてろくに相手の顔も見えちゃいない。

顔はもう涙だか涎かわからないものでぐちゃぐちゃだ。体も血だか汗だかわからない液体でベトベトして気持ち悪い。

心拍数が上がって体が火照るように暑い気がするのに、背筋から冷氣のようなものが駆け巡る感じがした。

ああ、また死ぬのか。

諦めにも見える薄い笑みがこぼれる。

人は、死ぬとき走馬灯のように過去を振り返るって言う

がありや嘘だな。少なくとも俺にはそれは当てはまらなかったようだ。

何より今もおどろかして生き残れないかと心に反して動く目が、体が、そうさせてくれない。

通常では考えられないぐらいの情報が頭をパンクさせようとするがごとくぶち込まれ、そのせいか頭痛がする。

案外こっちの頭痛の方が体中の傷よりも痛いかもしれない。

しかし、その痛みも次第に感じなくなっていく。頭の中に靄が、かかるかのように、意識がとうのいていく。

そして……俺は、薄れゆく意識の中それに気づいた。

秘密の花園に咲く薔薇のように濃くそして鮮やかな血し
ぶきが舞い散るこの混沌のなかで。——天使を見つけてしまった。

第一話 日常はストーカーと共に

成績、運動神経ともに普通……あ、いや足だけは少し速いか。

そして、学校および私生活での問題は一切なし、髪も目も目立ちたくないという理由で、今まで一度も染めたこともなければ、カラーコンタクトなんぞを手につったこともない。

髪の手入れさえふだんあまりしないのでいつもぼさぼさだ。

容姿は……容姿は、普通である……と、おもつ。

と、とにかく、そんな平々凡々な17歳、かみさが ゆうつ神坂優斗には、ある悩み事がある。

「——でね、あまりにもしつこかったから蹴り飛ばしてやったんだ。で、そしたら——」

なんの取り柄も問題もないはずの俺が、いや、ないからこそなのか、俺には幼いころから悩み事があった。

「——もう、これだからああいう人は——って、ちょ、ちゃんと聞いているの優斗。聞いてますか？おーい、ゆーとさーん。おーい。」

友人は皆この悩みについて俺が話そうものなら、
くはてろゝだのく唐変木ゝだのくこのイケメンめが……リヤ獣は爆
発しろゝだのむちゃくちゃに言ってきやがる。

くそ、なんでだよ……俺はケメンなんぞじゃな
いっちゅゝに、そもそもイケメンというのはだな――

「ねゝてば!! 聞ってるの優斗!!」

ズイっ!

「つうを!! なんだよ、ちょ、近いつてびっくりするじゃな
いか。」

「ちょとゝさつきから話しかけてるのに、ずっとだんまりし
て……ちゃんと聞いてたの? それとも、そんなにも私と、しゃべる
のはいやだっというの!」

「いやいや、ちがうって!! ちゃんと聞いてたって、ほら、
あれだろ……えつと、その……そう! 委員長の田中が飼ってる
猫のジオルジュの話! いやゝほんとあのふてぶてしいデブ猫みて
たらなんか癒されるよなゝ。こないだなんて俺、あのデブ猫のおか
げで――って、あのゝ星羅さん。お目がお据わりになられてい
ますよ」

「……はあ、今、私が話していたのは昨日私に告白してきた

男の子の話！ 優斗が話してくれって言うてきたから話してるんだよ。ほんとうだったらあんな人のこと、思い出したくもないっていうのに」

「あゝそだった。そうだった、ゴメンって。それにしても星羅はほんつとモテるよな、今月で何回目だ？」

そう俺の悩みとは今、俺の目の前にいる美少女、
時任星羅ときとうせいりのことである。

いや、彼女がどうというわけではない。むしろ
彼女は完璧といっていいだろう。

流れるような黒髪は、肩のあたりまで伸ばされてお
り、雪原を思わせるようなその肌は白く透きとおっている。そ
して、黒真珠を思わせるかのような勝気な瞳は見ているだけで吸
込まれそうだ。

さらに、彼女の秀でているところは、容姿だけではなく、
い。テストをやらせればいつも満点をとり。スポーツをやらせれば
その素晴らしすぎる運動神経を隠すことはできようはずもなく。そ
して何より、極めつけは誰とでも平等に接する性格と太陽を思わせ
るような笑顔と明るさである。この性格のおかげか彼女のファンは
男子だけにとどまらず女子にもたくさんいる。

「むゝこっちは、迷惑しているだけなの。ファンクラブとか名乗る
意味わかんない集団解散させたばっかなのに……鬱だゝファンク

ラブは優斗のだけでいいっていうのに」

「はぁ？　なんでそこで俺の名前がでてくるんだよ。俺はお前のファンクラブなんぞに入っとらんでの」

では、問題とは？それは、彼女が幼馴染という理由だけで、俺とほぼ全ての行動を共にしていることである。美少女の幼馴染だとしてふざけんな。うらやましすぎるぞ！と大半のやつはうらやましがるだろう。

いや、俺だってこんな子が近くにいるだけならそりゃ嬉しいよ。……そう、だけなら。星羅の熱狂的なファン（ストーカー野郎）が星羅に振られたことなどで、何かにつけて俺に逆恨みをぶつけてこなければ。

「はぁ、ほんとと優斗は鈍感っていうか、にぶチンっていうか……私の気持ちにも気づかないし。」

さらに、悪質なストーカーとなると時々星羅にまで被害が及ぼうとすることがある。そして、その対処を俺が陰ながらしているせいということもあり、被害は甚大である。

今だって、俺はただ穩便に下校したいだけなのに隣の電気屋を曲がって商店街から路地に入った途端に何者かが襲ってこないかと、びくびくしている。こんな生活のせいかいつの間にか俺の足はかなり鍛えられた。……ええい、ちくしょう。どう見ても立派な大根足です。本当にありがとうございました！！

「ん？ゴメン、何て？聞こえなかった。」

「な、っなんでもないわよ」

「……そんな、怒鳴らなくてもいいだろうに。それよかファ
ンクラブ（ストーカー）には気をつけるよ最近の奴は過激だからな」

「それは、こっちのセリフよ」

「うえ、縁起でもねえ事いうなよ。俺は、昨日のあいっただけ
でもうおなか一杯というか、足がいっぱいっぴいだってのに」

「……昨日のあいっ？　って、そういえば昨日なんで先に帰
っちゃたの？　おかげで私、一人で帰らなくちゃならなかつ——」

『——次のニュースです。○×県の○×市でまた、連続通
り魔事件がおきました。被害者は20代の女性で連日と同じく固執
に何度も刃物で刺された跡があり。今回の事件を含めると軽傷者は
二名重傷者は四名、死亡者にいたっては二名と異例の事態のなつて
おり、警察は対策本部を。市に移し捜査活動を——』

「また、通り魔？ て、言うかこれ私たちの住んでる地区じゃない！ こんな身近まで通り魔きてたんだ。なんか……怖いね。」

ふと足を止め、普段は見向きもしない電気屋の液晶テレビに俺も目を向ける。どうやら通り魔は何かオカルトチックな文字を犯行現場にいつも残しているようだ。かなり不気味だ。最近までいたい病気からいまだに抜け出せずそういったものに憧れを抱いていた俺でさえうすら寒く感じるほどなので星羅のそれは、普段のストーカーのせいもあいまって相当のものだろう。

「ふつ、大丈夫だよ、星羅だったら通り魔なんて拳ひとつでけちよんけちよんさ。そして、俺はそんな白馬の王子様にメロメロメロンってね」

「はあ、優斗そこは、嘘でも俺が守ってやる。とかそういったこと言うべきでしょ、メロメロメロンって……。なんか、色々と不安がってた私のほうがバカみたいじゃないまったく」

そう言うやいなや、星羅は先ほどのニュースのことなど忘れたかのように、また昨日のこの不満を俺にぶつけてきた。

日はもうほとんど落ちあたりは薄暗くなってきた。

罵倒を聞き流しているうちに、気づけば俺達は、商店街の喧騒を抜け自宅まで後数10メートルといったところまで来た。た。

目の前の青信号を渡りさえすれば我が家はもう目と鼻と先だ。ちなみに、星羅の家は俺の家のすぐ向かいである。

「ねえ、ちよつと優斗。」

「なんだよ、早く渡っちまわねーと信号変わるぞ」

現に信号の色はもう点滅を始めている。周りの人はもう渡り切っており残すは自分達二人だけであった。

「ねえ、あの人なんかおかしくない？ さっきからずっとこっちを睨んできてるんだけど。ほら、あの黒っぽいカツパ見たいのかぶってるひと」

「ん？ って、あれ隣のクラスの黒沢浮世くろさわうきよじゃね？ ほらいつもタット占いとかしてる変わり者って有名な女子。そんなことより、信号変わっちまったじゃねーかよ」

「そんなとつて……。いくら変わった子だからって普通あんなところ構わずに睨み付けてくる？それにあの子普段は大人しい子だよ——っえ、ちょ！！黒沢さん赤、赤、信号赤だつてば」

まだ少し離れているが、トラックがこっちにきていた。

さらに運が悪いことは、こういう時に限って重なるらしく。よく見れば運転手はうつらうつらとしている。

星羅の悲鳴じみた声と黒沢の突発的な信号無視が辺りを騒然とさせる。

「みいつけた」

なんなんだあいつ、あんなにずっとこっちを睨みつけていたのに、俺と目が合ったとたんニヤけ出しやがったぞ。

ぶつぶつと呟きながらニヤけ続けている黒沢は、おもむろに今までその黒フードのなかに隠すようにしていた右手を振り上げ星羅に飛び掛かった。

振り上げられたその右手を見れば、そこには刃渡り30センチはあるかというぐらいの深紅の狩猟用ナイフが握られていた。

異形の物のあまりの禍々しさに誰もが啞然としてしまう。

それは、星羅も例外ではなかった。

「あぶねえ」

「きゃっ」

ナイフが星羅を切り刻まんとしているすんでのところで、星羅を抱きかかえるようにその脅威から庇った俺は、腕に刺さったナイフをそのままに痛みをこらえながら黒沢の方へ向いた。

「つつ、ちくしょう、痛つてえなあおい。てめゝ黒沢いきなり切りかかってくとはどういう見だあおい」

「そつそんな、なんでそんな物を……。私はただ、優斗様に最後の供物を捧げようとしていただけなのに。なんです……」

黒沢は意味の分からないことを叫びだし、この世の終わりだと言わんばかりの形相で、その焦点が合わない目をさ迷わせながら、しかしその足取りはしっかりと、あとずさるように元来た道を逃げだした。

「おい、まて逃がすかよ」

ここで、俺が庇った時に浴びた血で震えている星羅のことを考えてやっていられれば、こんなことにはならなかったのだろう。星羅が襲われたということに激昂し我を忘れていた俺は、黒沢を無意識のうちに追いかけてしまっていた。

眩しいくらいのトラックのライトのなかで、最後に聞いたのは、つんざくような誰かの悲鳴じみた俺の名をよぶ声だった。

第二話 馬車の中で竜は眠る

目蓋^{まぶた}が重い、視界が真っ暗だ。

俺は死んだのだろうか……不思議と痛みを感じなかったように思える。

いや……、あの勢いでトラックに当たったって即死でないはずがないだろう。

じゃあ、一体今のこの俺は、なんだっていうんだろうか？

まさか、天国！？ いやはや、そういった類^{たぐい}は一切信じていなかったんだが。

こんな、風にそれを否定されるとはな……。って、なんで俺はここが天国って決めつけているんだろうか。目蓋^{まぶた}すらまだ開けていないって言うのに。

いや、俺だって逝くんなら天国の方がいいし別に好きで地獄に逝きたいとおもわんけどさ。いかんせん。まったく俺よ、どうしてそんなに考えが安易なんだよ。そもそも、あの時だ

つてもつとよく考えて行動していれば——はあ、やめよ、なんか寂しくなってくる。

それにしてもさつきから体中が重たい。と、いうかここかなり寝心地が悪い。背中が痛い。

……そろそろ、起きにやらんよな。いつまでもこのまま寝そべってるわけにもいかんだろうし、なんか、遠くから軍靴の音も聞こえてくるし。はあ。

できればこのままずっと寝そべっていたいんだが。体、だるいし。……もういっそ、このままずっと寝てようかな。いやいや、それならもつと寝心地の良いところで……ってまた俺は、現実逃避して。——ん、軍靴？

「よつと、……はあ、起きちまった。てか、案外簡単に起きられた。じゃなくて、ここ……どこだ？」

見ればそこは、天国というには余りにも殺風景で、また、地獄にしてはあまりにもおどろおどろしくはなかった。見えるのは、大自然。

目の前には、7、8メートル程の幅の道のようなものが15メートル程の高さの岩壁沿いにある。

岩壁と道はかなり長くどうやらここは、岩壁沿いに造られた街道のようだ。さらに背後にある鬱蒼うっそうと茂る木々が制する先の見えない暗い森や、見上げれば岩壁の端からも緑が見えることから、人里からはある程度離れたところであろうということがうかがえる。

いきなり自分が見知らぬ場所にいるだけでも俺のキャパシティーはパンク寸前だというのに、そこにはそれすらもどうでもよく思わせるような光景が広がっていた。

人、人、人、——50人程の人がそこにいた、いや、街道らしきところなのだから、人が多少多くいてもさして問題はないだろう。問題なのは、彼らの姿と目の前で繰り広げられている戦闘である。

そう、戦闘。彼らはなぜか戦っているのだ。

屈強そうな体躯の男たちがその身に甲冑をつけ40人がかりで馬車3台を取り囲むように守っているところを、耳の上や額に角を生やし、さらに数人だが羽や尻尾までも生やしている人々が襲いかかっている。

おいおい、何だよこれ！　なんであの人ら角とか羽とかナチュラルに生やしてんのよ。てか何、あの髪と肌の色。赤色でさえもありえねえっていうのに青とか緑とか。……初めて見たぞ、あんなの。

それに、あの甲冑と剣。本……物か。やべえ、何だあれ、何なんだよあれ！どこそこのRPGゲームですかここは！！

角を付けた人々は、少人数ながらも常人では計り知れないほどの素早さと自分の身の丈と同じくらいの大きさ程もある大鎧を振りまわし騎士らしき人たちを翻弄していた。しかし、それもやはり数にはかてなかったのか、6人程斬り殺したあたりで次第に取り囲まれ。気づけば一人、二人と順に斬り捨てられていき。ついにはたった1人となってしまった。

そして、その最後の1人も今、その顔に憤怒の形相をはりつけながら崩れ落ちるかのように倒れた。

被害状況は？

くそう、悪魔どもめ！おい、積み荷は大丈夫か。

はっ、積み荷には問題はありません。……しかし、
騎士^{ナイト}クラスの者を2人も喪ってしまいました。さらに神官^{メイジ}職の者が
重傷を負ってしまい。今日はもう進むのは無理かと、すぐにでも野
営地点を見つけませんと。

つつ、しかたあるまい。残りの騎士^{ナイト}クラスの
者を中心に3班に部隊を再編成する。くれぐれも、周囲の警備をお
こたるな。目撃者は、発見しだい即始末しろ。

やつべ、あいつらこっちにきやがった。どうしよ、
隠れるべきか！？あいつらの言葉何一つ理解できなかったけど、ど
う見てもヤバそうな雰囲気だし。何より目線がやべえ。

って、どこにかくれば！？　ここらへんで下手に
隠れてもすぐに見つかるだろうし。

ああ、ちくしょうどうすれば、と、とりあえずその
草むらにでも――

ガサガサ

あつ 「あつ」

「あ、あは、あははは、……は、ハロゝな、ナイス
ミートユー」

ニコ

………死ね

ニヤ

俺を見つけるなり男はそのロングソードを振りか
ざしてきた。

「ちよ。ちよちよ。タンマ、……タンマ!! ほら、
俺何も持っていないって。なっ、だからほら、そんな危ないもん早く
下せて。スマイル、スマイル――」

く空を切る。

しかし、俺の言葉は男のロングソードと共に空^{むな}し

たばりやがれ！！

ちっ、ちょこまかと悪魔が。素直に斬られてく

つぶね。」

「——スマイルって言ってんジャンよ。うを！あ

これは、やばい、マジでやばい。言葉通じねえよ。俺の全力のハッピースマイルセット丁重に返品されちゃったよ。どうしろってんだよ。

なんとか、紙一重で避け続けていた俺だが、それれも当然のように長くは続かなかった。体には、避けきれなかった斬撃によるかすり傷がいくつもできていた。

さらに、騒ぎに気付いたのか残りの奴らもやってきており、俺は、もう逃げることもかなわない状況に陥っていた。

何だよこれ、死んだと思ったら。見知らぬ場所に倒れていてあげく、わけもわからん奴らに殺されるなんて。

くそ、くそ、くそ、くそ！　何か、何かないのか。

俺の思いとは裏腹に、目の前の現実は非常に無情で。囲まれた俺は、俺の命を刈り取らんとする男たちの持つ死神の鎌により蹂躪される。

じわじわと訪れる死の足音に対し、必死に抗おうと俺の体は、なおも希望を探し続ける。

頭が痛い。ひどい頭痛だ。

しだいに、出血のせいか意識が朦朧もろろとなり始めた。

た。

そしてこんな状況の中、俺はありえないものを見

神秘的に輝く空色の髪を腰辺りまで伸ばした10人が見ればその10人全てが魅了されるに違いないであろう、人形のような可愛らしさを持つ齡^{よわい}13、4くらいの少女が、その世にも珍しい髪と同じ色の瞳をこちらに、じっと向けていたのだ。

死の瀬戸際でありながら、俺はその天使のような

神秘的な美しさと機械じみた無機質な瞳に目を奪われていた。

はは、頭に血が回らないせいか、こんな妄想するなんて……。しかし、妄想であれ何であれこんなかわいい子に最後を看取られるとは、俺も随分出世したもんだぜ。

無意識に少女の方に手を伸ばしていた。まるで、長年探し求めていたものをやっと見つけたかのように。

すると、少女は俺の手を取り何かを確信したようなそぶりを見せ。すっと立ち上がった

マスター
所有者の存在の認証、完了。内蔵魔導高炉の始動
オルグリー
確認、完了。敵の位置補足、完了。最優先事項の確認、完了戦闘を開始します
オルグリー
オルグリー

キューインとタービンを回すような音と共に少女の姿が消えたかと思ったその瞬間、俺を取り囲んでいた男たちの体が一気に爆ぜた。

な、なんだ。どうしたいって何があった！？

先ほど全体を取り仕切っていたリーダーらしき男が、異変に気づいて声を荒げながら近づいてくる。

わ、わかりません。その悪魔を仕留めようとしたら、いきなり妙な女が——う、うあああああ

次々と、残りの男たちも爆ぜて死んでいく。

く、だれか本部に救援要請の伝令を伝えてこい！……おい聞こえてなかったのか！！大至急、救援の要請を——

必要ありません。チェックメイト 終了です

死屍累々とした中、少女がふわっとまた俺の前に突然現れた。そして、俺の胸にそっと手を置き。

S i e z u m i r I c h z u I h n e
n E i n V e r t r a g ! !

その鈴のような澄んだ声を高らかと上げた。

すると、不思議なことに二人を包むかのように辺りが黄金色の光で満ち溢れていく。

「マスターとの契約を確認。これから再生治療魔法を展開します。」

少女がまた呪文を唱えだすと。今度は二人の体が碧色に光りだし見る見るうちに俺の傷はゆっくりだが確実にふさがっていく。

しかし、俺の傷が治るにつれて、少女が時折だが苦しい顔をし始め。さらには、その体も下から徐々に薄く透明になっていく。

「え、えっと。大丈夫なのか？」

「はい、問題ありませんマスター。マスターの傷は責任を持ってこのアルス・X・マキナが、その全存在を使って治しますゆえ」

「ちょ、ちょっと待った。そういう意味じゃない、君のそれは大丈夫なのか、消えかかっているぞ。いやまて、落ち着け俺。さっきこの子は何て言った——そう、全存在を使ってマスターを治癒する！？どういう意味だ。今の君の状態と何か関係しているのか！？」

「ですから、私の存在を全て魔力に変換しマスターを私が消滅してもお治し——」
「今すぐ、これをやめるんだ！——」

「しかし、それではマスターの治癒が」
「いい

から、早く。」

「了解、再生治癒を解除します。」

すると、俺たちから発せられていた緑色の光は消え失せ。そして、彼女の透明化は膝辺りでとまった。

「ふう、よかった……一時はどうなる事かと。おい、君もつと自分を大切にしろよ！！まあ、ともかく、アルス・X……マキナさんだっけ。助けてくれてありがとう。」

「いえ、マスター。私はマスターの僕として当然のことを、したまです。」

「そう、それだ、そのマスターってのは何なんだ。」

それにさっきのは？ 君は？ そもそもここはどこなんだ？」

「貴方様はこの世界の新たな我ら精霊の主たる精霊王様になるべく転生なさった存在。そして、私は魔導機構を司る魔工の精霊であり先ほどの契約により晴れて正式にマスターの僕へと加わった者でございます」

は、……。何、転生？ 精霊王？ 契約？ ナン
デス力それは。

その後、色々とアルスにこの世界のことを聞いた話をまとめると。

どうやら向こうの世界でテックソウルなるものゝたぶん黒沢が持っていた深紅の狩猟用ナイフのことだろう」を使った儀式により、俺はこっちの世界の精霊王へと転生させられたようだ。そして、なぜだか本人も知らないらしいのだが、生まれた時から精霊王にその存在全てを賭けて仕えよという使命をもったアルスが俺の転生をいち早く感じ取り。俺を迎えに行こうと来たところ、俺のことを人間が敵対している亜種人だと勘違いした奴らが俺を襲っていたのを発見したということらしい。

いや、バリバリ人間の姿しとるし……と嘆いていたらどうやら、この世界では黒髪黒眼というのは精霊にしる人間にしる亜種人にしるありえない色なんだそうだ。

「てか、まあもう、人間やめてるみたいだけど……」

「どうかしましたか？」

「いや、なんでもねえよ。それより、アルお前、俺は元の世界に戻ることはできないのか？」

「アル？ マスター、アルとは誰のことですか？
ここにはマスターと私しかいませんよ」

「お前だよ、お前。アルス・X・マキナなんていちいち長ったらしくて呼びづらいんだよ。だから、親睦を深めるって意味も込めてアル」

「アル……アル、いいですねアル！私、とても

気に入りました。こんな気持ち初めてです。この名前、大切にしますね！」

そういうと、アルは少し顔を赤らめ何度もマスターがくれた名前、マスターがくれた名前と呟いている。

「気に入ってくれたのはいいんだが、アル、お前顔赤いぞ。まださっきの存在消滅の後遺症があるんじゃないのか？ あんま、無理すんなよ？」

いまだ一人で呟いているアルの顔を覗き込む。

「はひィ、だ、大丈夫ですなんでもありません」

「お。おう。そうか。ってそうだ。さっきも聞いたんだが俺は元の世界に戻ることはできないのか？」

「それは、……私にはわかりません。マスタ
ーは元の世界に戻りたいんですか？」

「いや、んゝまあぶっちゃけ。長年夢見てい
たファンタジー世界にこれてかなり嬉しいよ、しかもいきなり精霊
王なんていう胸高鳴るジョブになってるし。さっきは、かなり危な
かったけど。これからここで暮らしていくのも悪くないとおもっ
てるんだ」

「でしたら――」

「でも、俺さ、向こうの世界でやり残したこ
とがひとつだけあるんだ。それがちよつと心残りなんだよ」

「そう……なんですか」

話しながらさっきの男達からの戦利品をち
やっかりと入手するべく作業をしていると、残すは男達が必死に守
っていた馬車だけとなった。

1台目と2台目の馬車のなかには寝袋や食
糧といった冒険するための道具がそろっており、かなり良い収穫で
あった。

しかし、問題は3台目で起きてしまった。

そのなかにあつたものは、なんと檻の中で眠っている少女であつた。しかも、ただの少女ではなかつた。少女の整つた顔立ちや、その白髪の中まで伸ばされたふわふわとした髪に掛けられた薄汚れたフードによって隠されているかのようにそこには角があつた。

少女の耳の上には羊の角のような少し湾曲した立派な角があつたのである。

「……………」

「どうかいたしましたか、マスター？ ……女の子のようですね。マスターどうしますか？ その子」

「どうするも何も、こんなところに1人置いていくわけにもいかないだろ。夜になったら何がでるかわからんし」

「ですが、マスター連れて行ったところでこの子にとっての安全はさほど変わりませんよ?」

「え? なんです。こっちにはアルがいるし。それに、もしものときは、俺も微力ながらもこの子を守るからここに置いてくよかよっぱど安全じゃね?」

「すみません。マスター先ほどお伝えし忘れていたのですが私、先ほどのような力はもう発揮できません。存在を魔力に変換した際に精霊としてのランクが降格した上に契約したばかりなので魔力制御ができない状態なのです。さらに私、最近生まれただけなものでそもそのステータスが安定しておりません」

「うそ」「ホントです」

「いやいや、だからって置いていくわけにはいかな
いよ」

「わかりました。では、私もできる限りのサポートを尽くさせていただきます」

「うん、よろしくたのむよ」

少女を担ぎ。取りあえずは、どこか人がいそうな所を目指そうと、これからの方針を決め、準備を整えた俺たちは、赤くなり始めた夕空を背に街道を進むのであった。

はあ、星羅いまごろどうしてるだろ。何事もなければいいんだけど――

の
だ
っ
た。
。

こ
う
し
て、
俺
の
異
世
界
転
生
の
一
日
目
は
幕
を
閉
じ
る

第三話 シチューの味

あれから、程なくして俺達はなんのトラブルも無く無事に宿場町らしき所までたどり着いた。現在は最初に発見した宿の中にある酒場で、注文した料理をまっている。

先ほど人間じゃないということだけで襲われた俺だったが、幸いにもこの町は亜種人と人間が共に暮らしている町らしく、町の門番に呼び止められこそしたがなんとか怪しいものではないと納得してもらい中に入る事が出来た。

そもそも、先ほど宿屋のおばちゃんに聞いた話によると、亜種人を敵対視しているのは人間の中でも白の神と呼ばれる神様を信仰している者だけらしい。

まあ、どちらにせよ俺とアルの瞳と髪の色に加えてボロボロのフードをかぶった女の子を背負っているせいで町に入ってから終始目線が痛かったが……

ちなみに、宿代は先ほどの甲冑野郎どもからの戦利品で難無くすんでいる。

「で、早速なんだがこれからどうしていいかアル」

「そうですね、私もそうなのですが、まずは、マスターのステータスが安定なさるまではどうにも……」

この世界には人や生き物、さらには道具などの力量や職業などの適性力、それが持つ危険度を測るためにレベルやステータスというものを用いて測るのだそうだ。

これは、体内などに必ずあるといわれている魔力回路というものから測るらしく、現在俺とアルは生まれたばかりということでその魔力回路が不安定でレベルやステータスが測れないばかりか本来の力すら満足に出せない状態であるらしい。

霊って何なの？」

「んゝなあ、アル。そもそも、精

「精霊というのは、私のような何らかの強い力を持った道具や生物が長い年月を経てその身に一定の純粋な魔力を宿した者、または力そのものが集まり意志を宿した者だと聞いています。また精霊は自分が司っている力の管理をし、その力が絶え間なく流れるよう世界の均衡を守る役目があります。そしてマスター、もとい精霊王様はそれら精霊達を取りまとめ時には見守り、時には罰していく我々の父であり母なのです」

「我々の父であり母なのです……つか。なんか、そう言われると俺なんか精霊王になっちゃっていいのかな？ て、おもえてくるよ。現にさっきは、何もできずにアルに存在を消費してまで助けてもらっちゃっただけだし」

「マスター……大丈夫です。マスターならきつと素晴らしい精霊王様になれますよ」

こんな何のとりえもない俺でもアルは、俺のことを精霊王として認めてくれて、献身的に支えようとしてくれている。

「アルは優しいな」

「い、いえそんな」

アルのためにも立派な精霊王にな

らなくちゃな……。

「あ、そういえばさ、俺の前の、そのつまりは先王の精霊王はどうなったのさ。それかまでの精霊王は？ 会えればこの世界のこととか、精霊のこととか色々詳しく教えてもらえそうだし、俺も少なくとも今よりはうまく精霊王としてやっていけそうなんだけど」

「先王も何も、今までそのような者は一人もいた記録はありませんよ。マスターが最初の精霊王様で

す」

「は？ どうゆーこと」

「私達にとって精霊王様というのは、マスターの世界でいう神々のようなものでして、伝承やおとぎ話でしか知り得なくその存在すらいるかどうか怪しいものでした。ですが、数年前、ちょうど私が生まれた時ぐらいでしようか、ある人間の魔導師が私達精霊に精霊王がもうすぐ転生してやってくると言言し、そして私達精霊もまたその存在の波動を感じ取ったのです」

…驚愕の事実再びである。

.....

「あ、マスター。予定よりかなりはやいですが私達のステータスが確定されようとしていますよ」

ちなみに、数年前に誕生したアルとさつき転生したばかりの俺がなぜ同じタイミングでステータス確定するのかという点。もともと精霊王というのはその存在の力の大きさをゆえに成長が驚異的にはやいからだそう。そして、精霊王が成長する時に発する特殊な波長に当てられたアルもまた成長が驚異的に促進させられたらしい。

そうこうしているうちに、俺とアルの体が契約をした時みたいに強く光りだした。そしてさらに今度は体中に黒い入れ墨のような線が幾重にも体をめぐった。

「わ、いったいなんだい……………」

「大丈夫かい黒髪のお兄さん」

光と線が現れたのは、一瞬だったがなんとも言えない痺れが体中に駆け巡り思わず目の前の木製の長机に突っ伏してしまった。

「え、ええ。なんとか」

「今は、他の客が少ないからいいけどあんまり室内で魔法はやめとくれよ。ほれ、料理そこに置いとくからね」

気づけば、体中になんとも言えない不思議な力があるような感じがする。これが魔力ってやつなのか。何かふわふわする。体も軽い。

「はは、ありがとうございます。」

おばさ——おねえさん」

「ん、わかればよろしい」

やべえ目が本気^{マシ}だった。背すじに感じた寒気により何とか起き上がることができた。

「おや、そっちのフードのおちびちゃんも起きたようだね」

町に着いてから起こそうとした
が起きず。また、俺が離れようとする
と寝苦しそうに唸るのでそばで寝かせて置いたのだ。よく見れば
頬に涙の筋があったこともあり
相当辛いことがあったのだと
うかがえ、可哀そうに感じも
うすこしぐらいは寝かしておいても
いいかなと考えたからでもある。

「う、ううん。」

「おはよう、って言うても今はもう夜だけどね」

「え、こ、ここは!？」

「取りあえず、座りなよ。ちょっと飯もあることだし一緒に食べながらはなそう」

「は、はい」

すると、少女は椅子ではなく地べたに座った。

「なにしてんのさ？ 早く隣にきなよ。料理冷めちゃうよ」

「あの座っていいんですか。私なんか隣に座って一緒に食事していいんですか」

「はあ、何いってんのさ、さっきからそう言ってるじゃん。ほらはやく、俺もう腹ペコなんだよ」

少女は、おそるおそると座り

目の前のシチューもどきをまじまじと見つめる。しかし、見つめるだけで食べようとはせずまだおろおろとこちらを見上げる。

が邪魔なのか)

(ん？ ああ、なるほど首輪

あげたらどうです)

(マスター、彼女の首輪取って

！？ へ、なにこれ)

(ん、そうだな。……ってアル

(先ほどステータスが安定した
ことによって念話ができるようになったのです。契約している精霊
とならどれほど離れていても会話することができますよ)

(すげー。携帯要らずだな。つ
とそうだった首輪だな。ていってもあんなこつい首輪どうやって外
せばいいんだ？)

（そのまま首輪に手を当て外れよと念を飛ばせばいいのです。ですが、折角ですので今回は私の力を披露しましょう。これからマスターに憑依します）

というやいなや、アルは光だし半透明になって俺と重なる。そして文字通り背後霊のように俺の後ろに憑依した。

（うを、なんだこれ。アル、青白い光の線が見えるようになったぞ）

（はい、マスターそれこそ私の魔王精霊としての力、魔力観測です。首輪の中に見える青白い線のどれでもいいので切れろと念じながら指で切ってみてください）

いわれる通りに首輪の中に見える青白い線のうち一番太い線を指でなぞるようにしてみると、ぷつんといともたやすく線は切れた。そして、それと共に首輪が光の粒子となって消え去っていく。

「おどろいた、あんた精霊使いだっ
たのかい。そのなりからただもんじゃないな、とは思っていたがま
さか精霊使いだっただけ。しかもなんだい、実体化出来る上に人
型の精霊なんてめったにお目にかかれないような高位の精霊じゃな
いか。さらに、完璧服従ときた、はあゝたまげたもんだ。……それ
に、奴隷の首輪をはずしてやるなんて粹なことすねやるじゃないか。
このゝ色男が」

「ちょ、やめてくださいよ」

アルの憑依を解き、指でつつき
ながらからかってくるおばちゃんをあしらいつつ料理を一口食べ
る。お、想像以上に美味しい。

「照れるな照れるな、よかった
ね。おちびちゃん」

「ほら、君も早く食べなよ。美
味しいぞ」

少女は、今起こったことが信じられないのか口をぽかんと開けたまま啞然として固まっている。

いつまでたっても動きそうにないのでその開いた口にシチューもどきをスプーンで掬って入れてやる。

「お、美味しい……。美味
美味しいです」

「だろ」

「はい、ほんとに……美味し
い……ぶぐ、えぐ、ずず……グズ」

「おいおい、泣くこたあない
だろうよ。ほら、旨いもん食ったときはうれしい顔しなきゃ、な？」

「はい」

ニコ

その後、泣きながら嬉しそ

うに、そして必死に料理をほおばる少女が落ち着くまで話し合いは
せず食事をすることにした。遠い昔、星羅と一緒に食べた母さんの
シチュウーの味をおもいだした。

第四話 それぞれの事情

場所は変わって、今俺たちは宿の自分達の部屋
の中にいる。

「と、それじゃ食事も済んだってことであらためて、はじめまして。俺の名前は、神崎優斗。あ、神崎の方がファミリーネームで名前の方が優斗ね。そっちの娘は仲間のアル。馬車の中で見つけた君をほっておけなかったもんで悪いけどここに勝手に運ばせてもらったよ。そうだ、君の名前は？」

「……………名前」

またも、泣きだしそうになる少女。

「え、どうしたの？」

「いえ、またお父様とお母様から頂いたこの名を名乗れることができるなんて夢のようで——これもそれもユートさんとアルさんのおかげですね……………私はクラン・クル・マルグリットといいます。助けてくださってありがとうございました。ユート

さんとアルさんは命の恩人です。それに奴隷の首輪まではずしてもらって、——どれだけ感謝してもしきれません……このご恩はかならずやこの命をもつてしてでもおかえしします」

「命の恩人だなんて大げさな。お礼なんていいよ。俺はただ人として当たり前なことをしただけさ。あと、首輪の方もきにしないでいいよ、さっきの様子から奴隷っていうのは俺の想像している通りのことだろうからさ——俺、そういうの許せないたちなんだ。アルもそうだろう」

「はい、勿論でございます。マスター」

「でも、あのままだったら路頭で飢え死にして魔物が野生動物の餌になるか、どこかの変態に飼われて尊厳を踏みにじられながら生きるしかなかったところをユートさんは希望を与えてくれました。そんな方にお礼もしないだなんて——それになにより竜人^{ドラグーン}としての私の誇りが許しません。どうか、私になにかさせてください、なんだったらこの体を使って——」

「ストップ、ストップ！ わかった、わかったから。いくら今ここに俺らしいないからって脱^{ダツ}ごうとしないで！！」

「わかりました」

「ふうしかし、お礼か——んどうしようかな」

（マスター）

（ん、どしたアル）

（先ほどの、この世界の説明の話の続きなのです
が。私、あとは精霊としての有る程度の常識と魔工のこと、それと
少しだけの魔法に関する基礎知識しか知らないんです）

（と、いうと？）

（つまり、この先人として肉体を維持していかな

くてはならないマスターのこの世界での生活のサポートやアドバイスができないことになります)

(げ、マジかよ。今はまだ鎧野郎どもからもぎ取った金やらなんやらがあるからいいけど。こりゃ早めに職やらなんやらをどうにかしなければな——あ、そうだ)

「なあ、クラン。君この世界のことくわしい？」

「この世界？ 世界のことはわかりませんが生きていくすべてそれなりの常識はあるつもりですけど」

「それじゃあさ、これから俺らの仲間として一緒にいてくれないか？ そして、出来る限りでいいからさ俺達にアドバイスをしてくれよ。実は俺達、ある秘境からやってきた身でさ、色んな事を知らないんだ アルもそれでいいだろ」

「無論マスターのご意思に反対などございません」

「あの、そんなことでいいんですか。いえ、というよりも私なんかがついて行っていいんですか？」

「もちろんさ。むしろこんなかわいい子と一緒にいられるんだから贅沢なぐらいだよ。だからこれからよろしく」

クランの顔を覗き込んに微笑みかけてやる

「は、はい」

うん、やっぱり。かわいい子には笑顔がいちばんだな。

——顔が赤くなっているのがちょっと気になるけど。ほっとしたからかな

あと、アルなんでそこで睨む。俺なんかしたか？

「マルグリット……マルグリット……ドラグーン竜人のマル

グリット……あ！まさかおちびちゃん。あんたここからずっと北西にいった竜^{ドラグニア}の国の第三王女のクラン・クル・マルグリットかい！！
——あ、布団ここにおいとくよ。」

「へ！？ は、え、いや。あつと、えつとその——」

「クランって王女様なの！」

て、いつのまにおばちゃんここに来たの！！と
いつかどこから聞いてたの！？

「うゝ、は、はい。そうです」

「王女なのに奴隷？ どういうこと。あ、いや話
しづらいことだったらべつに話さなくてもいいんだけど——」

「いえ、ユートさんとアルさんになら話してもいいんですが——長い話になりますよ？」

「いいよ、何より俺はクランのことが知りたいか

ら
「

「わ、わかりました。じゃあ話しますね——今、
ドラグシア
竜の国と人間の国こと白の国アマールが妖精の国の魔石をめぐって争っていますよね」

「え、そうなのかい」

「な、なんのこと」

「そう、なのですか」

「……………皆さん、知らないんですね」

「常識なの！？いや、そんな残念そうな目で見ないでよ
い」

「ここ森ニリムの国は他の国と少し離れたところにあるか

らねえ。それに、こんな田舎の宿場町にそうそう新鮮な情報はこないよ」

「戦争ですか、力の変動が気になります。他の精霊たちは何か行動を起こしているのでしょうか。マスター、どう思います？」

「どうって、そんなこと聞かれてもな——て、あなた、いつまでここにいるんですか！仕事はいいんですか？」

「あ？いいんだよ。何か今日客すくないから」

「えっと——と、とりあえず皆さん話続けていいですか」

「あ、ああ、すまないクラン。続けてくれ」

「で、その二国が戦争をしているんですが。私の国つまり竜ドラグシアの国では、戦時直前急に王族率いる穏便派と、宰相および上流貴族率いる強行派のいがみ合いをはじめてしまって内政は無茶苦茶になってしまったんです」

「それがクランが今ここにいるのと、どう関係がある？」

「泥沼化する睨みあいの中、ある日痺れを切らした強行派がついに王族殲滅という愚行に走ったのです。ほとんどの貴族に根回しがいきわたっておりまた。また、私の腹違いの姉の一人である第二王女ジル・フェルゼ・マルグリットの裏切りもあって、私たち一族はなすすべなくただ淘汰されていくしかありませんでした。そんな中私の家族は、多くの犠牲を払いながらも命からがらなんとか国境近くまで逃げ切っていたのです」

クランの顔色が段々と暗くなっていき、かすかに体も小刻みに震えている。

「ですが、あと一步で隣国の魔法エルニカの国へと亡命できたというところで、何故かそこで待ち伏せしていた白アマールの国の艦

隊と鉢合わせになってしまったのです。お父様とお母様は、その命尽きるまで必死に私と第一王女であるラウ・フェルゼ・マルグリットお姉さまと第一王子であるクルス・クル・マルグリットお兄様を守ってくださいました。しかし、その決死の抵抗も空しく私達三人は捕まりました。そこで、ラウお姉さまとクルスお兄様はせめて私だけはどうかして逃がそうと二人で決心なされ、私の逃げ出す活路をつくりだそうとしてくださいましたのです」

その時のことを思い出したのかクランの頬には一滴の涙がつたっていた。

「最後に見たのはぐずりながら二人を止めようとする私に優しくそして仕方なさそうに微笑みかけてくれたラウお姉様とクルスお兄様の後ろ姿でした。私は、ただ逃げることでしかできなかつたんです。大切な人たちを見捨てて——それが、ここまで私を生かしてくれた人たちの思いにこたえる最後の方法だと信じて——なのに、なのに私は結局捕まってしまうて——」

クランの泣きじゃくる姿をこれ以上見ていられなくなった俺は、その小さい体をそっと抱いた。

「あ——ぐす——すみません。また、見苦しい

姿を——見せちゃいました」

「いいんだ、クラン。俺たちはさっき結成したばかりだけどれっきとした仲間だ。仲間ってもんは嬉しいことも悲しいことも共に分かち合っていくもんだよ　そうだろ？」

「はい」

「クランさん、これからは私とマスターがずっと一緒です。まだ会って間もない私達ですが存分に頼ってください」

「アルさん——お二人ともありがとうございます」

「あんたら、いいやつだねえ。おばちゃん感動しちゃったよ。やっぱり精霊使いの貴族様ってなるとそこらへんの冒険者とは器の大きさが違うねえ」

——この人結局、最後まで一緒に聞いてたのかよ。

つか、今自分でおばちゃんって……

「あの、俺別に貴族なんかじゃないんですけど」

「何言つてんだい、そんな上等な服身につけて、
そんなのよっぽど高貴な人しかきれないよ」

たしかに、見た限りこの世界の生活水準は、R
PG風らしく中世ヨーロッパぐらいの水準みたいだから、俺の今着
ている詰襟の学ランはかなり周りから浮いている。

そういえば、なんで転生したっていうのに俺は
学ランをきているんだろ？ いや、生れたまんまの姿であんな街道
沿いの森の中にほうりだされていてもこまるんだけどさ……。

「この服は、そのちょっとわけありでして。え
っと自分でもなんで着ているのかわんないっていうか。なんていう

か。ははは
「

「はあ？どういことだい
「

「とにかく、俺は貴族何かとは違いますよ
「

「そうです。マスターは貴族なんかじゃなくて
精霊王様なんですから
「

「は！？」 「え！？」 「ちょ！？」
「

何いつてんのこの子！！ それはいつちゃだめ
でしょ。仮にも俺、精霊^{きみら}達の神様なんでしょ！？ クランはともか
くおばちゃんの前でそれ言っちゃまずいでしょ。

「信じられないけど。嘘がつかない精霊がいうん
だからほんとうなんだろっねえ
「

「あの、えっと私。ユートさんが精霊王様とも知らずなれなれしく触ってしまって——えっと、そのすみません」

ほら、二人とも混乱してる。

（アル）

（なんでしょう、マスター）

（力のある精霊とかがどういった扱いをされていくのかもっとよく考えような 俺、伝説上の生き物なんだしさ）

（？ はい、マスター）

「二人とも落ち着いて、あとクランはそんなに畏まらなくていいから」

「は、はい」

顔がこわばっているぞ、クラン……。

「それにしても、なんで精霊王なんてのがこんなところに。まさか、ちかじか何か良くないことでも起きるのかい」

「いえ、それは俺にもわかんないんですけど。俺がいるのは気まぐれみたいなものだとおもってください。あと、クランと俺のことは内密に」

「任しときな、わたしやこくらへんで一番口が堅いって有名だからさ。ホントだよ」

本当に大丈夫なのか。俺の勝手なイメージじゃこの人ついっつかりそこらへんで喋ってしまいそうなんだが……。

その後、おばちゃんは部屋から出ていき。俺達も今日はもう疲れたということで、今後のことは明日になってから話そうということになった。

それぞれ床に就くと、すぐに二人のかわいい寝息が聞こえてきた。

俺も色々あったからか布団に入っただとたんに眠気が襲ってきて深い眠りに落ちた。

第五話 異世界での日常

ん、んゝま、眩しい。もう少し眠っていたい。

なぜかいつもよりベッドがふかふかしているので、起き上がる気力が微塵も出ない。

それにこの抱き枕、むにむにと不思議な感触がして気持ちいい。

……こんな俺持ってたっけ？ どっちにしても布団が
らでたくねえ。

そういえば、昨日俺なにしてたんだろ。

んゝ何だか色んな事があつた気がする。

あゝそういえば可愛い子と出会つたような。

ゴソゴソ

ん、何か布団の中がもぞもぞする！

せつかくの安眠を阻害するものを確認すべく目を開けてみると、視界は空色一色に染まっていた。

「そうそう、こんな感じの綺麗な色の髪の毛と瞳を持った子が俺を助け——て、はぁ!？」

コレはナンデスカ。

そつと体を起こし布団の中を覗き込むとすやすやと寝息を立てながら俺に抱きついてゐる全裸のアルがそこにいた。

あゝ思い出した。昨日はアルとクランと打ち解けあった後もう遅いからって寝たんだつた——って、どうしたらそこからこの状況に繋がる！

ま、まさか寝ている間にあんなことやそんなことをし、知らず知らず——いやいやいや、まあまあ俺よ、それはない。断じてない。あつてはならない。ふおおお、おさまれ我がリビドーよ。

そうだ、何より俺の服や布団が乱れていない。もし何か——ナニかが起きたとしたならば、これは絶対にあり得ない。……俺の心の中は超絶に乱れ荒れ狂っているがな！

……それにしてもこの子ほんと可愛いな。肌も真っ白ですべすべだし、なにより小さい体のくせにでるところはしっかりとでて——

「うんあ——あ、マスターおはようございます」

「お、おお、おはよう——じゃ、なくて、なんで俺の布団の中に入ってるんだ！服は、服はどうした」

「脱ぎました」

「脱ぎました。じゃねーようとして脱いでんだよ!」

「昨日私、マスターに憑依して精霊としての力を行使しましたよね」

「したな」

「あの憑依には、魔力とは別の精霊だけが持つ特殊な力を使うんです。魔法なら空气中に漂っているエーテルを特殊な呼吸をしたり、食事をして物質に宿っているエーテル自体を取り込んで回復すればいいんですけど。この力を回復させるにはマスターからある一定の範囲にいないけません」

「だからって裸で抱きつかなくても」

「いえ、このほうがいいのです。先ほどの回復方法ですが回復率を上げるにはマスターと近ければ近いほどいいのです」

「さいですか」

頑としてゆるぎないアルの目つきに押し負けた俺は、アルのいうとおりにするしかないようだ。

「ふああ、あ、ユートさんアルさんおはようございま——
はう、あ、あああの、あのあの、ごめんなさい、ごめんなさい。み
見るつもりはなかったっていうか、私も昨日は必死だったからあんなこと
いちゃったけどそうだった経験がないから、こういったこと

の免疫がないっていうか、お二人の間柄だったら当然っていうか、えっと。」、ごゆっくり!!」

クランが顔を真っ赤にして、勢いよく部屋から飛び出して行った。

あれは絶対に、確実に、猛烈に誤解している。むしろしてない方がおかしいといってもよい。

いや、うん。なんだろうこの気持ち。なんていうかこう家に帰ったら自分の秘蔵コレクションが綺麗に本棚へと整頓されているのを発見した時のように空しい。とにかく空しい。限りなく空しい。

「なあ、アル。」

「何でしょうかマスター」

「その精霊の不思議パワーはもう充電出来たのか」

「はい、先ほど。今ならいつでも出撃できますよ」

「そうか……じゃあとりあえず服着ような」

「了解しました」

昨日できた俺とクランとの信頼関係が早くも崩れかけています。

あの後、どこで聞きつけたのか出会ったとたんに、からかってきたおばちゃんの精神攻撃を受け流しながらも何とかクランの誤解を解くことができた。

くそ、あのおばちゃんのニマニマした顔がウザすぎていまも頭の中をよぎる。

しかし、これでやっと心置きなく朝食にありつける

「あの、すみません。私、へんに早とちりしちゃって。そうですよね。ユートさんはそんなことする人には見えませんもの。あ、いや優しそって意味ですよ」

それは、見るからに俺がへたれってことが、クラン。

「いいよ、あの状況じゃそう勘違いしてもしかたないしね」

「あの、マスター。マスターさえよければ私に、夜のご奉仕のほうも任せていていただきたいのですけど」

「ははは、朝っぱらから真顔で何いってんだろっねこの娘は」

「そ、それは、私には全くもって欲情などしないのでおととい行きやがれ！と、いうことですか」

とたんに、目を伏せて寂しそうにするアル。

く、なんだこの異常なまでの可愛さは。

「そんなことはない、アルは十分魅力的だって、って何を言わせるんだ恥ずかしい。さっきも言ったけど俺は、別に君らにそんなことを求めてなんかいないの！あゝもう、この話はなし、終わ

り。もう終わり。」

はあ、なんで俺、朝っぱらからこんなにも疲れてんだろ。

……く、朝飯が冷めてやがる。

「とにかく、そんなくだらない話よりも今後のことをきちんと話しあうべきだろ。俺としては朝飯をくってからは何よりもまず俺達の服装をそろえたいと思ってているんだが。このままじゃ三人とも何をするにも目立ちすぎて動きづらいだろうしさ。あと俺達はこの町にずっと居座るわけにはいかないんだ。俺には精霊王として世界を見て回らなければならぬ義務があるらしいから」

俺は帰る方法もできれば探したいしな。

ちなみに、服装で言うところの今アルは、昨日出会った時と同じ白と青を基調としたフィギュアスケート選手が着ていそうな、少し豪華そうなビスチェ風のレオタードとミニスカートを着ている。

なんでも、精霊の正装らしく自らの魔力でできているぞうだ。

「え、でもユートさん、私お金持ってないですよ」

「大丈夫、いくらかは手持ちがあるからそこは安心していいよ」

この世界は金貨、銀貨、銅貨という三種類の共通通貨で一般的に取引されている。

三つの通貨の価値はだいたい金貨1枚⇐銀貨10枚⇐銅貨100枚といった感じだ

ちなみに、ここの宿屋の一人分の宿泊代は一泊二日食事なしで銅貨30枚である。食事はだいたい一食銅貨3枚くらいだ。

そして、20日分の三人の宿代をすでに払っている現在の俺達の手持ち金は、それでもなお金貨8枚と銀貨1枚さらに銅貨91枚とかなりある。

「そんな、それじゃあ私恩を返すどころかまた、お二人に迷惑かけちゃうじゃないですか」

「これは、俺達からの気持ちだと思って何も言わず受け取ってくればいいんだよ。あとそれじゃあ俺の目のやり場に困る。クランはかわいい女の子なんだからさ、他の野郎どもがいやらしい目でクランを終始見てくるっての何か腹立つし」

クランの服装は奴隷だったせいか、かなり薄手なぼろぼろのワンピースみたいな服とフードのみである。

「はっ」

自分の今のかつこを思い出したのか赤面するクラン。

「それにちゃんとした装備をしなかったことで旅に支障をきたした、なんてことがあったらそれこそ問題だしさ」

「それは、そうですね。う、ううわかりました。それじゃあその分旅の道中での食事などで頑張らせて頂きます。家事には結構自信あるんですよ私」

「それは、頼もしいな。なあアル」

「はい、マスター。私も今まで料理などをしたことがなく、どうしようかと思っていたところでしたので丁度よかったです。」

「今まで料理をしてこなかったって……アルさん、それじゃあ一体どうやって食事をしていたんですか」

「できなくはないんですが、一般的に精霊は食事というところでエネルギーを摂取しないんです。そもそもが力の象徴を具現化したようなものですからその存在を維持するたに魔力を貯めこんでおけば事足りますので」

「なるほど」

「それにしても、これだけ金をじゃらじゃら持ち歩いているとさすがに邪魔になるな。あと金貨と銀貨が非常に取り出しにくい」

「普段、生活用品や小物などを買うときはだいたい銅貨20枚程でことたりますからね……まとめ買いするにしても銀貨数枚で取引しますし。これだけの大金を常に持ち歩いているのは冒険者ぐらいですね。——そうだ！ユートさん職を見つけないと言ったましたよね。冒険者になられてはどうですか」

冒険者。なにそのすてきな響き。

「冒険者つてのはあれだよ、町の困ったこととか、魔物退治とか、はたまた未開のダンジョンとかの調査やクエストをするあの冒険者だよ」

「なんだ、知ってたんですねユートさん。はい、そうですねその通りです、その冒険者です。さっきこの宿の主人から聞いたんですけど、丁度この宿場町にも冒険者ギルドがあるみたいなので、服を買ってからでもいいんで行って見たらどうでしょう」

「いくいく、絶対行く！」

ギルドまであるのか。さすが“ザ・見るからにファンジ―世界”。なんか、俄然やる気が出てきた！

「おお、マスターのテンションがいつになく高い」

「すごい喜びようですねユートさん」

「だって、冒険者だぜ？ あつちの世界でなら男だったら誰もが一度は憧れる未知の大冒険を、仕事としてできるんだ。胸が高鳴らずしてどうしますか」

「あつちの世界？」

「ああ、そのことについてはまた今度話すよクラン。そんなことよりも早くこれ食っちゃって買い物にいくつぜ。そして、次は冒険者ギルドだ」

服屋は宿屋を出て数10メートル先の広場にあった。

この広場にはギルドらしき建物を中央に、それを取り囲むように色々な店が建ち並んでいる。

店に入ると店内には想像以上の商品が所狭しとおいであつた。

確かに、こんな深い森に囲まれ街道沿いにぼつんとある宿場町にしたら不釣り合いな大きさの店舗だなとは思っていたがまさか陳列数まで店内がこんなにも狭く感じさせられるほどとは。

「すごいですマスター。衣服の山が来ています」

「ああ、凄まじいな、アル。この世界の衣服屋はどこにもんなにも凄まじいものなのか。どうなんだ？ クラン」

「いえ、ここの国以外だったら、そう簡単にここまで立派なお店は見つからないと思いますよ。これはこの森の国ゆえの特色です。ほら、森の国っていうぐらいだから文字通り木や植物などの資源とそれにとまなう牧畜による様々な素材が豊富なんですよこの国。だから森の国は昔から衣服などの文化も栄えていたんです」

「なるほどな、だからこんにも大量に」

まあそれにしても向こうの住人である俺からしたらかなり異様な光景なんだがな。まるで某眼鏡の魔法使いの少年が活躍する映画の店みたいだ。

「私も知識では知っていたのですが、今まで森の国の服を手にしたことは無かった。だから、一度着てみたいな」と思っていたんですよ」

俺達がその陳列数に驚きなが喋っていると、売り子らし

き赤髪のポニーテールの女性がすかさずやってきた。

「いらっしやいませ、あら、見ない顔ですね。今日はどういったものをお探して？」

「俺達三人の衣服が欲しいんです。なるべく冒険がしやすいのが良いんですけど。オススメとかってあります？」

「冒険？貴族様がまたいたいどうして」

「あの俺達は別に貴族とかじゃないんですよ」

「あら、それは失礼した。冒険に適した服ですか。それでしてら、こんなものはいかがでしょうか」

いつのまにか商品を何着か持ってきている売子のお姉さん。

何という早業！！ ふと後ろを振り返ると、気づかぬうちに赤髪のお姉さん以外の売り子さんも2、3人やってきていて、アルとクランを取り囲んでいる。

「キヤー何この白ふわの可愛い生き物。思わず抱きしめたくなるわー」

言ってるそばからクランを抱きしめている青髪のグラマラスなお姉さん。

「あの、ちょ、く……くるし」

ぬおお、クランめ。う、うらやまし——じゃなくて、何とけしからん！

「こつちの子もお人形さんみたいに可愛い。それにこんな髪色はじめてみた。見る角度によってこんなにも色が変わる！まるでお空のようだね。ねえ、あなたこの髪どうなってるの？」

「すみません生れつきでして私にもよくわからないんです」

「いや〜ん、話し方もクールでキュート」

「ちょっとちょっと、私にもお喋りさせてよ、貴方だけずるいわ。あ、そうだわ丁度とびっきりの貴方に似合う可愛い服があるの」

アルはアルで緑髪のお姉さんと薄紫髪のお姉さんによって着せ替え人形にされている。

「さあさあ、試着室はあちらです」

二人の弄ばれっぷりに苦笑いしている俺をぐいぐいと試着室へと押し込もうとする赤髪のお姉さん。

そして、その手に握られている服がいつの間にやらまた増えている。——ん？

「あの、店員さん。それもしかしてスカートですか、いや、もしかしなくてもスカートですよ。つか、どう見てもスカートだよこれ！..」

というか、よく見れば彼女が持っているもの全部女性ものだ。いや、よく見なくっても全部女性だよこれ

「そうですけど、なにか問題が？」

「問題しかありませんよ。なんで全部女性ものなんですか、俺男なんですけど」

「またまた、ご冗談を。こんなかわいい子が男の子なはずないじゃないですか」

「ご冗談でも何でもなく、俺は男です!!」

たしかに、俺は同年代の高校生の平均より少し、少くし背が低いがれっきとした日本男児だ！

くそ、まさか異世界にまで来てこのネタでいじられようとは。鬱だ。このことに関してはいつもなぜか人と出会ったたびにこのネタでいじられる。いったいどこをどう見たら俺を女に見間違うのか、いまだに皆目見当がつかん。

「ふふ、ジョークが好きな可愛い貴族様だこと」

貴族じゃないってことも信じてなかったんですね……。

そのあと、予想以上に時間が買ってしまったがなんとか全員それぞれ満足のいく買い物をする事ができた。

今、クランはクリーム色のボディスと紺のアンダースカートを、アルは深い青と白が特徴的なダブリエをそれぞれ着ている。ちなみに俺はTシャツもどきとジーパンもどきの上下にポケットがいつぱいいているトレンチコートを羽織っている。

「ふう、なんだか疲れたな——あ、そうだまだ言ってなかった、二人ともそれすごく似合ってる。とっても可愛いよ」

「はう」 「……………ふしゅー」

おお、二人ともあまりの店員さんのアグレッシブなプ
ツシュにだいぶ疲れているようで顔が赤い。アルなんて茹でダコの
ようになっている。てか、アル……お前蒸気出てるぞ。

「そうやってマスターは……突拍子もなく……か、かわ
いいなんて」

「そ、そうです、ずるいですユートさんは」

「ずるいですって、俺は見たまんまの事をいっただけな
んだが。なにかいけなかったか」

「く、もういいですマスター。なんでもありません」

「はあ、ああやってどれほどの女性があの手顔に食われてきたんでしょうかアルさん」

ふたりで何かブツブツと話し合っているようだが全く聞こえん。俺が何をしたというのか。

まあ、いいやそれよりもギルドだ。ギルド。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9624x/>

トランスマイクリエーション

2011年12月3日22時04分発行